

## 「開 会 挨拶」

株式会社 MTI 社長 安永 豊

昨年はこのフォーラムの場で、あの地震・津波・原発事故を経て技術の本質というものが問われた年だということをお知らせしました。あれから1年半経ったが、技術への信頼はまだ必ずしも回復してはいないように思います。そんな中、京都大学の山中先生がノーベル賞を取られたことは一服の清涼剤のような爽やかさがありました。そこには、政治でも売名でも企業の利益でもない、技術を純粋に追求する精神を感じました。

翻って、我々の海運・造船に於ける技術の主たるテーマは矢張り環境という事になります。2007年12月の海事三学会の省エネ船シンポジウムに於いて、マイクロバブル(空気潤滑)による省エネの話は初めて聞いたときに、眉唾だなと思った記憶があります。今日のテーマの一つでもある訳ですが、その技術が5年の歳月を経て Proven となり横展開を待つばかりになったという事は、大きな成果であり感慨無量です。一方で2007-2009年にかけての熱狂に似たエコシップ・ブームも、今はある種の幻滅期を迎えているような気がします。海運・造船業界の業績低迷から、経営のプライオリティが収益の改善に移っている事は、やむを得ない側面はあると思う反面、考えさせるものがあります。

11月17日付の東洋経済(「海運・造船、大氷河期」という記事が出ていた号)にコマツさんの中国建機が急落しても強気を貫いているという記事が出ておりました。生産に関わる固定費を3割削減してその分を研究開発費に回し、情報通信技術を生かして自動化を徹底した新しい建機の開発を目指すという事で、そこに経営の強い意志を感じました。

我々の身近な例では、韓国の造船業が非常に明確な方向性を示しています。研究開発予算も大きく、現代重工全体で160億円。ほぼ造船専門の三星が90億、大宇が70億。一方、日本の造船業は上場10社の昨年のお開発費合計が126億円という数字があり、彼我の差は歴然たるものがあります。造船不況の只中にありながら韓国造船各社は海洋関係に積極的に進出し、ドリルシップの受注も旺盛、例えば三星は今年累計9隻・50億ドル相当の受注になっているという話もございます。

残念乍ら、日本の海事クラスターの動向を見ていると、一体感、或いは明確な方向感というものが共有されていないような感じが致します。日本の海事クラスターは一つのエコシステムとして、これまで世界に冠たる製品としての船を造り続けてきた訳ですから、今こそ一体となって力を出し合うということが求められているのではないかと思います。勿論現状ではサバイバルが重要な課題になるのはやむを得ないことですが、では一社だけが生き延びれば良いのかというと、日本の場合はそうではないように思います。

ガリレオの有名な言葉「それでも地球は回っている」を借りるならば、それでも地球は汚れ続けています。造船や海運が儲かろうが儲かるまいが、毎日毎日地球は汚れ続けている。これに対してどう立ち向かうのかということ。それがこの業界にあって技術に携わる我々の使命です。MTIは一企業の研究機関として8年間活動してまいり

ました。良い時も、悪い時もありましたし、これからも多分順風ではないと思いますが、そういう中で、この汚れ続ける地球にどう立ち向かうのということを皆さんと一緒に考えて行きたいと思います。取り上げねばならない課題は毎日毎日湧き出し続けておりますので、研究開発というものも取り巻く環境に関わらずサステナブルでなければなりません。

前述の通り、研究開発予算が数社まとまっても韓国の一社に満たない位のレベルである事実から考えると、各社単独でバラバラに取り組んでいたのでは出来ることも限りがあると思います。深みのあるものや広がりのあるものの研究開発には、それなりにお金も掛かります。どうすれば、お金も労力も智恵も出し合えるのか。そういう仕組みを作る必要性を痛感しています。

MTIはこれまで船を含めて研究する場を提供し、共同研究や国交省の補助事業などで皆様と一緒にやらせて頂いております。恐らくこの2-3年は茨の道であることは皆様共有されている認識だと思っておりますが、そんな時だからこそ前述のコマツさんのように次に来たるものを見据えて、その開発に投資をして行かなくてはいけないのではないか、そして、そんな姿勢が業界挙げて求められているのではないかと思います。

また MTI は日本郵船グループとして、プロのユーザーとしての側面をこれからも磨き続けていきたいと思っております。それは運航の現場に於ける計測であり、そこから得られたデータの解析だと思っております。そしてそれらを運航に反映させてゆくと同時に、設計の方にフィードバックしていく事も重要な役割であると認識しております。また、物流におきましては、ユーザーであるお客様の声に真摯に耳を傾け、ニーズに合った技術やソリューションを開発し提案してまいります。

無論私ども一社だけでは出来ることに限りがあり、一緒にやって頂ける皆様のご協力を頂いてやってきた訳ですが、そのようにして、この1年やってきたことを今日はお話させていただきます。この時間が有益なものになりますよう一同がんばりますので、宜しくお願い致します。